

京都大学山岳部笹ヶ峰ヒュッテ (夏季開放期間)

はじめに

京都大学山岳部笹ヶ峰ヒュッテ（以下、京大ヒュッテ）夏季開放期間（8月16日前後一週間）へのやや自然史的なお誘いです。京大ヒュッテは、100ヘクタール余りの広さを持ち100年以上の歴史をもつ笹ヶ峰育成牧場の西端、標高1330メートルの草原にあります。1928（昭和3）年の竣工以来、地元杉野沢の方々や高橋健治さんをはじめとするOB諸氏の尽力で、1999年の大改築を経て80年の歴史を持ち、半世紀を経て再訪されるOBの姿も見られます¹。妙高市杉野沢から乙見山峠と小谷温泉に至る県道沿いにありますが、静謐な雰囲気を保っています。好天が続く乾燥した特異な気象条件のもとにあり、最高気温は25℃程度まで、最低気温は時には10℃以下に下がる時もあります。自然観察のほか、妙高山、火打山、焼山、天狗原山、雨飾山、黒姫山への登山基地ともなります。

図1 夏季開放期間の京大ヒュッテと南面の草原



¹ 竣工時の様子は、『京都帝国大学新聞』（昭和3年12月1日）の記事に見ることができます。

目次

はじめに	1
目次.....	2
図目次.....	2
夏季開放期間の魅力	3
概要.....	3
植物.....	3
昆虫.....	6
チョウ類.....	6
トンボ類.....	8
ガ類	8
その他の昆虫類	9
哺乳類・鳥類・爬虫類・両生類.....	10
注意事項	12
服装.....	12
刺す・咬む・引っ搔く	12
最後に.....	14
参考文献	14

図目次

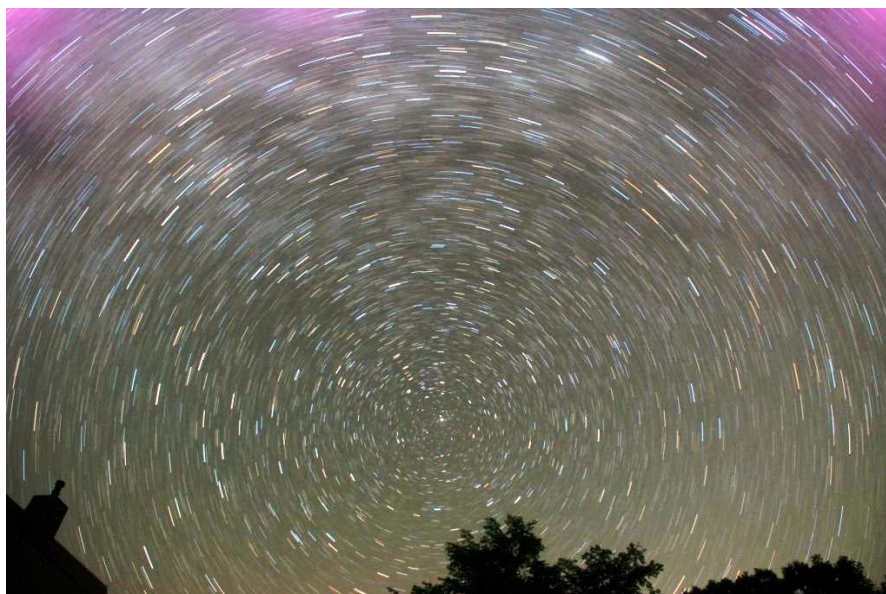
図 1 夏季開放期間の京大ヒュッテと南面の草原	1
図 2 北極星を中心とした星座.....	3
図 3 ヨツバヒヨドリ群落とチョウの群.....	4
図 4 ヤマハギとハンゴンソウ群落.....	5
図 5 ヨツバヒヨドリに集まるチョウ（ヒメアカタテハ）	6
図 6 タテハチョウ類（シータテハ、コムラサキ）	7
図 7 アゲハチョウ類（キアゲハ、クロアゲハ、ミヤマカラスアゲハ）	7
図 8 ムカシヤンマ	8
図 9 オニヤンマと産卵中のオオルリボシヤンマ	8
図 10 イカリモンガ	9
図 11 夕陽に佇むホンドキツネと積雪期の巣穴.....	10
図 12 牧場の草原に佇むニホンアナグマ.....	10
図 13 ノスリの飛翔.....	11
図 14 シュレーゲルアオガエル.....	12

夏季開放期間の魅力

概要

京大ヒュッテが一般に開放される8月中旬の魅力は、盛夏から初秋への季節の移ろいを目撃することができることでしょう。この時期は、最高気温が通常25℃程度まであがる盛夏のきつい陽射しに目を細めながらも、定期的にヒュッテを吹き抜ける乾いた山風と谷風に下界で疲れた身体を休めることができます。東風や西風が吹き始めるのもこの頃で、朝の気温は10℃まで下がり、日没の空は秋のように高くなります。ペルセウス座流星群が観察できる8月12日前後、観察のために夜更かしをすると、はくちょう座に代わってペガサス座が天頂に位置するようになり、東の空にはプレヤデス星団やヒヤデス星団、そしてオリオン座も姿を見せます。以下、この時期の[植物](#)、チョウ類をはじめとする[昆虫類](#)、そして[哺乳類](#)をめぐって京大ヒュッテの魅力を記してゆきます。

図 2 北極星を中心とした星座



植物²

ヒュッテ南の広い草原の盛夏を彩る赤紫のノアザミと青紫のウツボグサ、そして黄花と白花のニガナが盛りを過ぎて種子を実らせ始めるこの時期に最盛期を迎えるのは、フジバカマに似た白紫色の小さな花をたくさん咲かせるヨツバヒヨドリです。地味ですが、

² 木本については、別稿を用意する予定です。

多くのアサギマダラやヒョウモンチョウ類、タテハチョウ類を呼び集める花です。お花畑に入りこむと、これらのチョウが湧き上がるように群舞するのを見ることができます。これらのチョウは、クガイソウの房のような青紫の花にもよってきます。緑の草原と白紫にアクセントを加えるのはコオニユリの橙色です。自生して10年近くたち株も大きくなりました。この花には、キアゲハやクロアゲハ、ミヤマカラスアゲハが立ち寄ります。自生しているコオニユリは笹ヶ峰牧場や笹ヶ峰高原の途中のスキー場にも点在しているのを見ることができます。また、ホタルブクロが青紫と白い花を草原や林縁の藪の中に見せ、黄橙のコウリンカが草原の真ん中に一本咲きます。盛夏の花々の最後として木陰に静かにエゾアジサイが濃い目の水色のガクを広げ、薄青いカリガネソウとソバナが静かに咲きます。

図 3 ヨツバヒヨドリ群落とチョウの群



初秋を告げる花々も咲き始めます。最も目立つのは、黄色い小さい花をたくさんつける背の高いハンゴンソウです。視線を草原に落とすと、同じく黄色系統のオトギリソウが点在して小さな花を咲かせます。カワラハハコが薄緑の茎と葉を方々に伸ばしているのも目に入ります。盛夏のノアザミに代わって背の低いノハラアザミが深紅の花をつけ始めるのもこの頃です。林縁には、ナンブアザミのほかにも新種としての認定を待つミョ

ウコウアザミが地味な桃色の小さな花をたくさんつけます。さらに地味なのはオヤマボクチです。

開放期間も末期になると、多くのミツバチを招き寄せるヤマハギが赤色の小さな花を一斉に咲かせ、山風・谷風に代わって吹き始める西風に白い葉裏をそよがせて秋の到来を告げます。オカトラノオやサラシナショウマ、オトコエシの花が緑の草原に白いアクセントをつけます。黄色の同じく小さな花をたくさん咲かせるアキノキリンソウも花芽をほころばせはじめ、草原に視線を落として目を凝らせば、ウメバチソウの白い小さな蕾やエゾリンドウを見つけることができます。秋を告げる最後のものとして、青緑ながら身を太らせ見事な房になったヤマブドウとサルナシの実が、秋の実りの豊かさを予告します。

図 4 ヤマハギとハンゴンソウ群落



ヒュッテから足をのばして、笹ヶ峰神社や宇棚の清水、清水ヶ池までの遊歩道をたどると、コウリンカの群落、日本海側には特異なアキノキリンソウの黄色い雄蕊をのぞかせる赤紫の小さな花、オヤマボクチ、オオシラヒゲソウ、そしてトモエソウの黄色い花も見ることができます。木陰で身を切るような冷たさの宇棚の清水で足を浸すのも楽しみです。盗掘による採集圧に耐えながら、この他に貴重な植物がありますが、これは公開しないでおきます³。

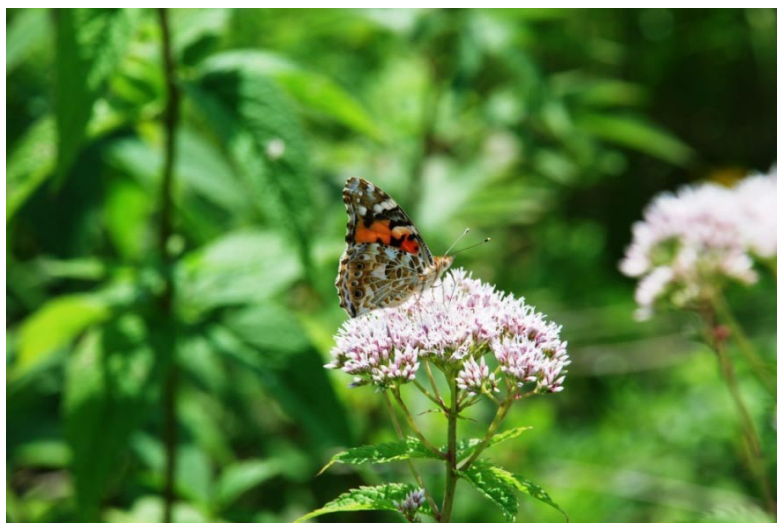
³ ビジター・センターには、盗掘によって絶滅した 30 種の植物の絵が展示されています。

昆虫

チョウ類

笹ヶ峰高原の魅力の一つは、チョウの数の多さと種類の豊富さで、90種類が記録されています〔『妙高高原町史』126頁〕。植生が複雑な構成をもつ草原、林縁、森林と多様なためです。近年、絶滅危惧種に指定されるものも多く、利益追求の採集は止めてください。多数のアサギマダラがヨツバヒヨドリの群落に吸蜜に訪れます。南西諸島からはるばるわたってくるアサギマダラの出現は5月末ですが、8月に入ると急速に数を増して、ヨツバヒヨドリ群落に入り込むと湧き上がるように飛び交います。同じ群落に群れ集うのはヒョウモンチョウ類です。確認されているのは、ミドリヒョウモン、メスがアサマイチモンジに似ているメスグロヒョウモン、ギンボシヒョウモン、ウラギンヒョウモン、オオウラギンスジヒョウモン、ギンスジヒョウモンです。コヒョウモンもいるそうです。ヨツバヒヨドリに集うタテハチョウ類には、ヒメアカタテハとクジャクチョウがいます。

図 5 ヨツバヒヨドリに集まるチョウ（ヒメアカタテハ）



以上が最も目立つチョウ類ですが、よく見かけることができるチョウ類は、アゲハチョウの仲間として、ミヤマカラスアゲハ、クロアゲハ、キアゲハが目立ちます（ウスバシロチョウも見ることができますが、7月上旬です）。乙見湖畔では、ミヤマカラスアゲハの集団吸水を見ることができます。タテハチョウの種類も多く、数多く生えているハルニレを植樹とするエルタテハが多く、シータテハ、アカタテハ、ルリタテハ、キベリタテハ、ヒオドシチョウ、コムラサキなども頻繁に姿を見ることができます。これら

は木々の梢を飛びますが、時々草原に舞い降りたりヒュッテの中に迷い込んだりして、絶好の撮影機会を作ってくれます。シロチョウ類は、モンシロチョウ、スジグロシロチョウ、ヒメシロチョウ（7月）、モンキチョウが見られます。シジミチョウ類は、7月に上旬に最盛期を迎えるヒメシジミが少数飛ぶほか、ベニシジミが目立ちます。ゼフィルス系のシジミチョウもいますが、ここでは公開しないでおきます。このほか、サカハチチョウ、イチモンジチョウ、クロヒカゲ、ヤマキマダラヒカゲ、ウラナミジャノメ、ミスジチョウ類を見受けることができます。

図 6 タテハチョウ類（シータテハ、コムラサキ）

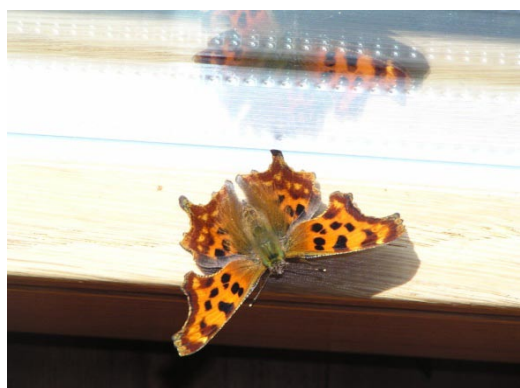
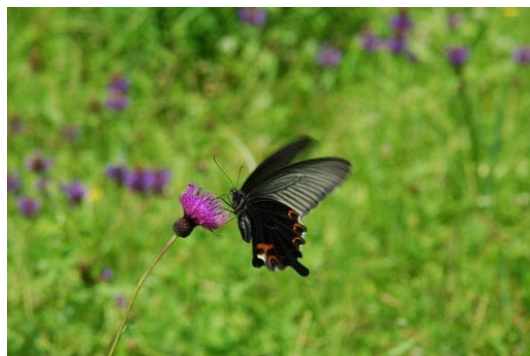


図 7 アゲハチョウ類（キアゲハ、クロアゲハ、ミヤマカラスアゲハ）



トンボ類

妙高高原では 40 種類のトンボが記録されています〔『妙高高原町史』123 頁〕。京大ヒュッテで確認したものはずっと種数がすくなくなります。開放期間中に姿を見せるトンボ類は、草原ではアキアカネが主人公ですが、ヒメクロサナエも見ることができます。笹ヶ峰ダム湖（乙見湖）畔ではオオルリボシヤンマやリスアカネ、マユタテアカネ、オニヤンマ、さらに奥に入るとムカシヤンマの姿も確認されています。産卵が盛んになる 8 月末になると、縄張り争いをする空中戦の羽音を聞くこともできます。京大ヒュッテによるトンボ観察はまだこれからです。

図 8 ムカシヤンマ



図 9 オニヤンマと産卵中のオオルリボシヤンマ

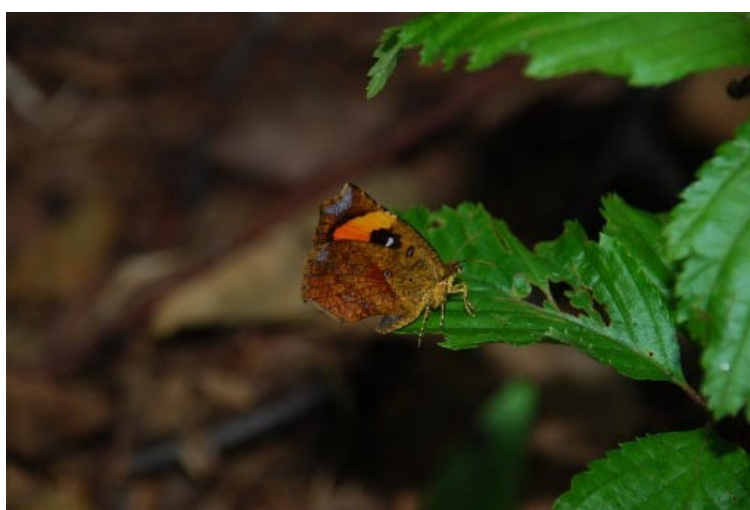


ガ類

ガ屋さん、大歓迎です。標高 1,000 メートル程度の溪流から 2,300 メートルの三田原山の標高差に加えて、多様な植生をもつ草原、林縁、森林という複雑な環境にあるため、

笹ヶ峰には多くの種類のガ類がいるようです。一般的なヒトリガ、ベニシタバ、ルリシタバ、ウンモンズズメ、アオジャクに加え、テングチョウに似たイカリモンガがいます。開放期間ではありませんが、7月上旬には貴婦人ともいえるオオミズアオが、9月に入ると翼長15センチになるようなヤママユガやヒメヤママユガが、複雑な模様を見せてくれます。『妙高高原町史』付録の『妙高高原の蛾類』には、1,091種名が挙げられています⁴。また、火打山周辺の高山蛾は地球温暖化の指標になるかもしれません。

図 10 イカリモンガ



その他の昆虫類

詳細に記述する能力はありません。珍しいものでは、社会的寄生性をもつチャイロスズメバチの営巣活動を観察できる夏もあります。2008年もありました。この年は、クロスズメバチが草原に営巣しました。草原の花々には多数のニホンミツバチの吸蜜活動を見ることができます。キイロスズメバチもいますが、ヒュッテには基本的に訪問するだけです。他に地蜂類が鍵穴に巣をつくったりします。ハチの専門家も大歓迎です。子供が好きなクワガタ類では、ミヤマクワガタ、アカアシクワガタ、コクワガタに出会うことができます。セミ類は、エゾハルゼミがすでに鳴き終え、アカエゾゼミが主人公です。2006年には一度だけミンミンゼミが鳴きました。ヒメホタルの輝きは、7月下旬に終わってしまいます。このほかカミキリムシ類、バッタ類などについては、記述の能力を越えているので触れないでおきます。

⁴ 妙高高原町『妙高高原町の蛾類』1986年。この別冊には、妙高高原町の蛾類に関する文献の一覧も載せられています。

哺乳類・鳥類・爬虫類・両生類

哺乳類は、人間と放牧されている肉牛・乳牛をのぞいて出会うことが難しいのですが、撮影あるいは目撃されているものとして、ニホンザル、ツキノワグマ、ホンドキツネ、ニホンアナグマ、ホンドテン、ホンドイタチ、タヌキ、オコジョ、トウホクノウサギ、ヒミズ、モグラ、シナノミズモグラ、モモンガ、ムササビ、アカネズミ、カワネズミ、トガリネズミ類そして正体が不明な草原性のネズミ類（ハタネズミかニイガタヤチネズミ）がいます。開放期間中は、ホンドキツネとニホンアナグマに出会える可能性が高いです。とりわけキツネは、巣穴が近在に確認され、ヒュッテ南の草原など目撃しやすいスポットと時間帯がいくつかあります。

図 11 夕陽に佇むホンドキツネと積雪期の巣穴

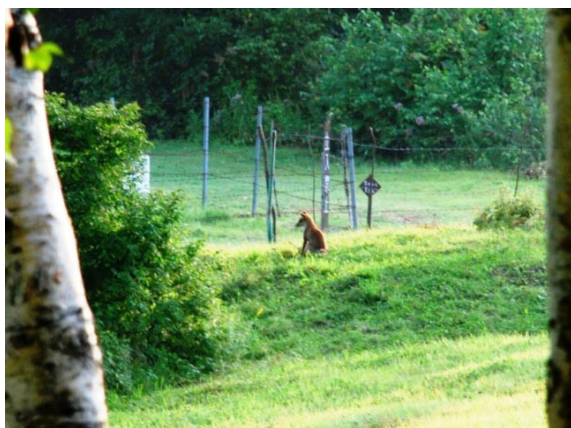
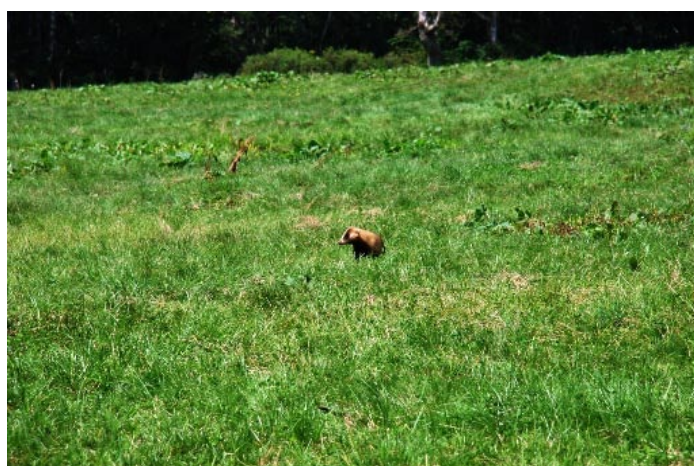


図 12 牧場の草原に佇むニホンアナグマ



鳥類のさえずりの最盛期である5月6月にくらべて静かな開放期間中の主人公は、昼間はウグイスとホオジロ、夜中はトラツグミでしょう。深夜にツーヒューと響くトラツ

グミの鳴き声は、涼しい夜をさらに涼しくさせてくれます。早朝、ヒュッテ南のヤナギとシラカバの大木には、コガラ・ヒガラ・ゴジュウカラの混群が常連として訪れます。近くの林からはキビタキやイカルなどのさえずりが響きます。ノアザミの種子を食べにカワラヒワの群れがやってきます。雨模様の日には地表すれすれに飛ぶイワツバメの群飛もあります。晴れた日に大空に視線を移せば、アマツバメの群飛やノスリやハイタカなどのワシタカ類の飛翔をみることができるともかもしれません。ドラミングの音を軽快に響かせるコゲラ、アカゲラ、オオアカゲラや巣に近づく人間に向かって警戒の鳴き声を発するモズにはよく出会えます。人の通らない昼間の明るい林の中や霧の出ている夕暮れ時、フクロウが梢に佇んでいるのを見ることがもできます。

図 13 ノスリの飛翔



爬虫類で確認されているのはヘビ類のみですが、マムシは目撃されていません。近年見掛ける機会が少なくなりましたが、アオダイショウ、ヤマカガシ、シマヘビ、ジムグリが目撃されています。両生類で目立つのは、残雪の残る5月初めに産卵をするヤマアカガエルと5月すえに交尾をするヒキガエルです。シュレーゲルアオガエル／モリアオガエルをみることがもできます。5月の産卵状況からクロサンショウウオが多くいることが分かっています。

図 14 シュレーゲルアオガエル



注意事項

服装

明るい色の服装を薦めます。スズメバチからの攻撃を避けるため、そしてマダニの付着を発見しやすくするためです。日中の日差しが強いため帽子が必要です。お洒落な日傘もよいでしょう。朝夕の気温が低いために、長袖長ズボンは必携です。登山を行う場合、雨具（できればゴアテックス）・水筒・非常食・懐中電灯・地図磁石が必携です。雨などで濡れた場合に行動の自由を奪うジーンズの使用は避けたほうが良いと思います。日焼け止めなどを使用する場合、必ず無香料のものを使用してください。どのような香料入りも、スズメバチなどを呼び寄せます。朝露や登山道のドロよけのためにスパッツがあればよいでしょう。ストックを使用する場合、必ず石突にキャップを付けてください。20年以上かけて植生復元を行っている火打山頂上付近の登山道の植生を守るため、そして樹林帯の登山道端のツルリンドウ、ツバメオモト、シラネアオイ、ソバナなどの生育地を守るためです。

刺す・咬む・引っ掻く

夕刻になるとブヨやカが出てくるので虫よけがあれば助かるでしょう。虫よけは、ハチには効きません。土中に巣をつくるスズメバチの仲間たちに気を配りましょう。スズメバチは、人の周りをブンブンと飛び回ることがありますが、じっとしていれば立ち去ります。攻撃を受ける場合、目にもとまらぬスピードで一直線に飛んできますから避け

できません。攻撃モードに入れないように注意を払っておく必要があります。ニホンミツバチは積極的に攻撃することはありません。

京大ヒュッテで確認されているマダニの咬傷は、一件だけです。しかし、マダニが媒介するライム病は、妙高高原での発症例が1987年に発表されたのを皮切りに、長野県や東北諸県、北海道で報告されています⁵。草むらに入る場合は、長袖長ズボンを着用し、発見しやすいように明色の服装をしてください。万一かまれた場合、直径二、三センチの赤い腫れの真ん中に2、3ミリの大きさのダニが咬みついているのを見ることができます。必ず伝染するというわけではありません。しかし、医者にダニを取り除いてもらい、後の投薬などの処置をしてもらわなければなりません。ペットの犬は、ほぼ必ず咬まれています。

引っ掻く生物は、ツキノワグマです。牧場内での目撃例は、5月や11月です。しかし、夏季、東西に走る県道をまたいで、国民休暇村一火打山登山道と京大ヒュッテ西側の涸れ沢との間の林内で、特に早朝に目撃されています。基本的に、ツキノワグマ側が人間の存在を察知して、じっとしてやり過ごすかヤブの中を慌てて逃げてゆきます。しかし、彼らが人間を察知しにくい状態——たとえば風音の強い日や沢のせせらぎが高い場所——では、意識的に声を出すなど、人間の存在を知らせてあげる必要があります⁶。

近年、出身地域がいまだ不明なニホンザルの群れも現れるようになりました。これらの野生動物は、餌をやったり威嚇したりせず、野生動物として適度の距離を保ってください⁷。

⁵ ライム病について、次のサイトを参考にしました。
http://www.jstage.jst.go.jp/article/jjrm/53/1/23/_pdf-char/ja/

⁶ ひとりで数個の鈴を鳴らす、1パーティー内で複数のメンバーが鈴を鳴らす、行列をなしている複数のパーティーが皆鈴を鳴らすなど、近年クマ除けとは異なる目的で鈴を鳴らす登山者が増えています。できる限り静謐な山登りを楽しみたいものです。

⁷ 日本では国立公園、とりわけ特別地域内でのペットに関する包括的な約束事は存在していませんが、次のサイトが参考になります。イヌは、野生動物にとって、人間や牛とは根本的に異なる存在であることを忘れないようにしてください。<http://www.nps.gov/jotr/parkmgmt/dogs.htm>

最後に

京大ヒュッテ周辺には、動植物についてこれまで紹介した以上のことがたくさんあるはずですが。皆さんの専門的・「マニア的」寄与によって、笹ヶ峰高原の自然の豊饒さ／多様性がより明らかになることを管理運営委員会は心待ちにしております。また、記述されている事項に関する訂正の必要などあれば、是非、一報をください。

参考文献

妙高高原町史編集委員会『妙高高原町史』妙高高原町、昭和 61 年。